創世ホール通信 No. 288

催し案内＋文化ジャーナル
2019年1月1日発行■北島町立図書館・創世ホール
電話：088-698-1100　ファクシミリ：088-698-1180
〒771-0207　徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91

創世ホール名画鑑賞会 29
神宮𠦪希林　わたしの神様

2019年1月19日(土)
2回上映　①午前10時30分～　②午後2時～

©東海テレビ放送

会場：3階　多目的ホール
入場料：大学生・一般
前売1,000円
(当日1,300円)
小・中・高
当日のみ1,000円
シニア(60歳以上)
当日のみ1,000円

主催：創世ホール名画鑑賞会
実行委員会(☎088-698-1100)

上映作品：「神宮𠦪希林　わたしの神様」(2014年、日本、96分)
旅人＝樹木希林　監督＝伏原健之　制作著作＝東海テレビ放送

■2018年9月に、惜しまれつつも世を去られた樹木希林さん。本作は2013年に撮影された、希林さんの「はじめてのお伊勢参りドキュメント」です。■2013年、折しも伊勢神宮は20年に1度の式年遷宮の年。神様のお引っ越しという大きなお祭りに巡り合わせ、希林さんは何を思い、感じたのでしょうか。■清らかな木漏れ日に包まれた伊勢神宮の神域をめぐり、神宮林の山や志摩の石神さま、そして歌人の岡野弘彦さんのもとを訪ねます。■いのち、家族、未来、そして愛…伊勢路でのさまざまな出会いをとおして、生きることを見つめなおす、そんな旅。皆さんもゆるりとごいっしょください。

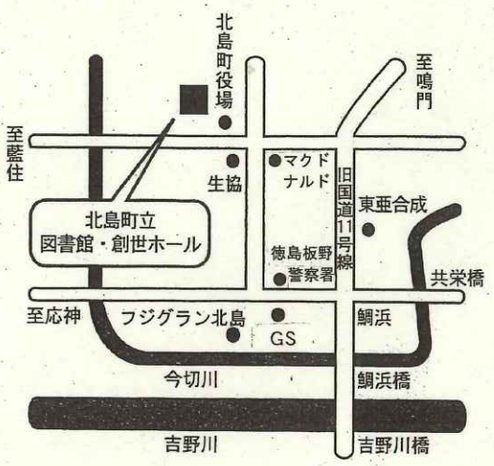
©東海テレビ放送

ギターフェスティバル

2019年1月20日(日)
午後1時30分～
会場：3階　多目的ホール　　入場無料
主催：徳島ギター協会(川竹☎088-631-7893)
徳島ギター協会のメンバーによる演奏会です。

木村大＆アンドリュー・ヨーク
GUITAR Concert 2019

2019年2月22日(金)
午後7時　　開場：午後6時30分
会場：3階　多目的ホール
入場料：前売：3,000円／当日：3,500円
※未就学児入場不可
主催：徳島ギター協会(川竹☎088-631-7893)
クラシックギター界のプリンス木村大と、グラミー賞を受賞したクラシックギタリストA·ヨークとの奇跡のデュオが14年振りに実現！お見逃し無く！



文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

追悼・長谷邦夫〔ながたに・くにお〕先生

驚くべき博識と多才とサービス精神の人

北島町立図書館・創世ホール元館長★小西昌幸

●2018年５月号から当欄では、池田憲章氏講演会「故郷は地球～脚本家・佐々木守がめざしたもの」を連載中ですが、今号は、昨年11月25日にお亡くなりになった当館ゆかりの長谷邦夫先生についての追悼文を掲載させていただきます。

■トキワ荘に深い関わりがあり、北島町立図書館・創世ホールとも大いに所縁〔ゆかり〕のあるマンガ家・マンガ学講師の長谷邦夫〔ながたに・くにお〕先生が、2018年11月25日早朝、お亡くなりになった。享年81だった。東京都東久留米市に住む知人の池田憲章氏（ＳＦ特撮研究家）から「小西さん。ぜひ、追悼文を書くべきだ」と勧められたこともあり、北島町での長谷先生講演会の時のエピソードなどを交えながら、長年のご恩に報いるためにも、力不足と時間不足を承知の上で哀悼の想いを綴り、天国の先生に捧げたい。

■以前、どこかに書いたが、私は、中学生の時に、長谷邦夫先生にファンレターを書き、返事をいただいている。勝瑞駅近くのかとう書店で、鉄腕アトムのイラストが小さく表紙に描かれた『ＣＯＭ』という雑誌を見つけ、以後、買い続けた。長谷先生は、同誌にパロディ漫画を連載して、それがとても面白かったのでファンレターを書いたのだ。私は、「無用ノ介」のパロディを思いつき、不用ノ介という人物を登場させ、あだ名を能無し犬にしたナンセンスものはいかがでしょうかとか、白土作品のパロディもぜひ、などと書いて送ったのだった。全く恥ずかしい、赤面モノ以外の何物でもない、田舎の中学生の手紙だったと自分でも思うシロモノだが、長谷先生はハガキで返事を送ってくれた。君のアイデアも面白いと思いました、白土作品は絵をまねするのが難しくてねー、というような文章の後に、近くサン・コミックスから筒井康隆さん原作の『東海道戦争』を描きおろしで出すので、ぜひチェックしてみてください、という情報が添えられていた。数十日後、私は新刊ホヤホヤの『東海道戦争』を書店店頭で見つけて買った。1969年（昭和45年）のことだった。今から49年前、約半世紀も昔のことだ。私は、坊主頭の、身長150センチぐらいの中学生だった。

■『東海道戦争』刊行の30年後、1999年10月17日に北島町立図書館・創世ホールは、ＳＦ界の重鎮・柴野拓美さんの講演会「日本ＳＦを築いた人たち～ＳＦ同人誌・『宇宙塵』40年の軌跡」を開いた。そのチラシには有名な「第１回日本ＳＦ大会」の集合写真を配置した。写真は柴野さんからお借りした。ネガがなく、パネルにしたものがあるだけということだったので、慎重に取り扱い、近所の写真店で複写撮影してもらってネガを作り、現物はすぐ柴野さんに返却した。この集合写真は、柴野さんを中心に星新一や筒井康隆や眉村卓や光瀬龍や手塚治虫が並ぶ物凄いものだが、長谷先生も入っている。写真は、もちろん柴野先生のご許可をいただいてチラシとポスター（チラシをＢ３に拡大したもの）に使用しているのだが、一応分かる範囲で、チラシとポスターを関係各位にお送りしておこうと私は考えた。そして長谷先生には、必ずお届けしたいと思った。昔ファンレターを書いて返事をもらった中学生が、30年たって、こんな催しを企画するようになりましたと、ぜひ直接お知らせしたかったのだ。

■ただ、長谷先生の現在のご住所が判然とせず、司書の人たちの力（レファレンス能力）を借りて、その結果、栃木県にお住まいであることが分かった。確か、徳島県立図書館の人のご教示で、長谷先生が『コミック・ボックス』に連載していたことを知り、その結果、突き止めたのだったと思う。

■柴野さん講演会のチラシ、ポスターをお送りしたら、長谷先生から封書が届き、そこには、講演会の盛況を祈っている、どうか柴野さんによろしく、という趣旨のことが書かれていた。私は、百万の援軍を得たような、高揚した気持ちになり、職務に没頭したのだった。柴野さんの講演会は、県外のＳＦファンが多数詰めかけ、大成功を収めた。柴野さんにもとても喜んでいただいた。長谷先生のことをお話しすると、長谷さんご夫妻の結婚式では柴野夫妻が媒酌人を務めたことや、長谷さんがあまりに多才で手を広げすぎているからマンガに絞り込んで仕事をされた方がよいのですがねー、というようなことをお話しになった。何しろ、長谷先生は、漫画家で最も早く『宇宙塵』の同人になり、例会にも参加し、その他に現代詩にも関わり、ジャズにも造詣が深い（山下洋輔トリオのライヴに通い続けた）という、とんでもない博識と多才の人なのだ。

■そんないきさつもあり、北島町立図書館・創世ホールの《書物文化を様々な角度から照射する講演会》シリーズで戦後日本ＳＦ黎明期を取り上げた次に、長谷先生にトキワ荘漫画家のことを語っていただくという企画を思いついたのは自然な成り行きだった。こうして21世紀最初の講演会企画は、長谷邦夫先生の「漫画風雲録～トキワ荘物語」に演題決定し、走り始めた（2001年３月４日開催）。

■長谷先生は、大変なサービス精神の持ち主だった。チラシに使用した写真はもちろん先生のご提供で、トキワ荘前で『墨汁一滴』と『墨汁二滴』同人メンバーが集合したもので、赤塚不二夫、よこたとくお、長谷先生、横山孝雄、大野豊、高井研一郎、伊東章夫、石ノ森章太郎の諸氏が写っている。チラシの裏面には、講演で取り上げる人たち（手塚治虫、石ノ森章太郎、赤塚不二夫、藤子不二雄Ⓐ、藤子・Ｆ・不二雄、寺田ヒロオ、つのだじろう、長谷先生）のプロフィールとイラストを掲載した。イラストもプロフィール文も長谷先生の筆による。北島町の宝物だ。

■この時、チラシに掲載した略歴は、次の通りだ。【長谷邦夫 ながたに・くにお●漫画家。大学講師●1937（昭和12）年４月７日、東京都葛飾区生まれ●都立芝商業高校時代に雑誌『漫画少年』誌上で石ノ森章太郎・赤塚不二夫を知り、同人誌『墨汁一滴』に参加。その関係でトキワ荘通勤組となる。1958年から貸本漫画を多数描き、その後トキワ荘グループのアニメ会社スタジオ・ゼロや、赤塚のフジオ・プロで活動。漫画制作の一方、ＳＦ同人誌『宇宙塵』や詩の同人誌にも参加する。70年代にパロディ漫画「バカ式」等を発表する傍ら赤塚のアイデア・ブレーン、ゴースト・ライターを長年つとめた。92年フジオ・プロ退社。近年は大学・専門学校で「漫画論」を講義●著書に『トキワ荘青春物語』（共著）、『少年マネジン』、『ニッポン漫画家名鑑』等多数。最新刊に『漫画の構造学』（インデックス出版）●椙山女学園大学・大垣女子短期大学非常勤講師●栃木県南那須町在住】

■長谷先生は徳島で２泊された（催し前日と当日）。空港でお出迎えをした時、カラーのイラスト入りのサイン色紙を20枚持参して、本を買ってくれた人にプレゼントして欲しいと言われ、仰天した。色紙イラストは20枚とも全部図柄が異なるもので、長谷先生とトキワ荘マンガ家との深い友情のにじむものだった。くじを作って、書籍購入者に抽選で当たるようにした。初日の夜は、先生を囲む会を開いた。宇宙塵同人の川島ゆぞさん（大塚製薬幹部）、徳島城博物館学芸員（当時）の須藤茂樹さん、ＮＨＫ記者で藤子不二雄ファンクラブ元幹部の東島大さんなど９人で長谷先生と歓談した。

■講演会当日の朝は、徳島県立近代美術館の四谷シモン展にご案内し、館の応接室で旧知の四谷シモンさんに会っていただき、先生は喜ばれた。

■講演会には200名の来場者があった。埼玉から来た人もいた。講演のラストは感動的だった。長谷先生は、最近トキワ荘があった場所を訪ねてみたが、そこは更地になっていた。これはきっと手塚先生が天国に持っていったのだと僕は思った、という趣旨のことを話して結びの言葉にされたのだった。熱心な愛好家なら、思わず顔を覆って涙にむせぶような、美しいしめくくりだった。その夜は、牟岐の坂本秀童さんと小松島の漫画家・上田譲さんと私で長谷先生を囲む食事会をした。その翌日、私と坂本さんが聞き役になりインタビューを収録した。２時間たっぷり先生に『まんがNo.１』について語っていただくことができた。この貴重な証言記録は、のちに「創世ホール通信／文化ジャーナル」に連載することができた。

■「漫画風雲録」の講演要旨は「徳島新聞」文化面に大きく掲載された。催し終了後も、長谷先生には、徳島滞在中の写真とともに、新聞記事や書簡をこまめにお送りした。先生から、こういうことはなかなかできることではありませんよ、とお褒めの言葉をいただき嬉しく思った。

■その後は、先生の著作が出るたびに、応援の意味を込めて電子書簡インタビューを行なって、「文化ジャーナル」に掲載させていただいた。『漫画に愛を叫んだ男たち』（清流出版、2004年５月刊）も、『赤塚不二夫のまんがNo.１シングルズ・スペシャル・エディション』（ディスクユニオン、2006年11月刊）も、『マンガ編集者狂笑録』（水星社、2008年５月刊）も、『マンガ家夢十夜』（水星社、2009年11月刊）も、『桜三月散歩道』（水星社、2012年１月）も全て取り上げさせていただいた。考えてみると厚かましい話だ。先生はプロなのだから、本当は文章を書いていただくたびに原稿料が発生するはずなのだ。だが、先生は毎回、喜んで応じて下さったのだった。感謝に堪えない。これらのインタビューはいずれも北島町のホームページの「文化ジャーナル」の中で読むことができる。特に『桜三月～』には北島町の講演会のエピソードも登場するので、町民必読だ（381頁～385頁）。

■先生は栃木でお住まいだったため、その後はなかなか私の上京時に会っていただくようなことはかなわなかったが、東京で３回、京都で１回、全部で４回お会いしている。『まんがNo.１～』が刊行された後、その復刻実現に尽力されたディスクユニオンの金野篤さんと私、長谷先生の３人で新宿で会った（2008年６月13日）。先生は、ゴールデン街のナベサンというお店に連れて行ってくれた。2010年には、２回お目にかかっている。作詞家・歌手のサエキけんぞうさんと水星社編集者の下平尾直氏と小西、長谷先生の４人で、またゴールデン街に行ったと思う（2010年８月20日）。そして、「柴野拓美さんを偲ぶ会」（2010年９月18日、東京工業大学蔵前会館）では、長谷先生と並んで参加した。また2011年には京都国際マンガミュージアムで先生が講演されたことがあり、聴講者として参加した（2011年11月20日、「ギャグマンガクロニクル」）。お目にかかったのは、それが最後となった。

■長谷先生には、毎号「創世ホール通信」をお送りし、年賀状のやり取りも絶やすことはなかった。2013年に脳出血で倒れられて、入所されている施設にお送りしていたが、ある時期から都内の息子さん宛てにお送りするようになった。直近の印象深い思い出は、2017年に開かれた東京ステーションギャラリーの「パロディ、二重の声―日本の一九七〇年代前後左右」展のとき、思いがけず学芸員の成合肇さんから『まんがNo.１』の全号展示の相談を受け、サエキけんぞう氏のお力で実現できたことだった。長谷先生の息子さん（長谷洋之さん）が私を紹介されたと聞き、胸が熱くなった。

■長谷先生からお聞きした赤塚さんとのこと、タモリさんとのこと、昔の編集者の凄まじい情熱の逸話など、紙幅の関係で書けなかった。

■フジオ・プロ退社後は、随分苦労されたのではないかと思う。でも先生は明るかった。そしていつもエネルギッシュだった。ただただ敬服するしかない。長谷邦夫先生、ありがとうございました。（20181228脱稿 文責＝小西昌幸）